

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 戦国期における神社の動向：九州地方を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永田, 忠靖, Nagata, Tadayasu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002477">https://doi.org/10.57529/00002477</a>

## おわりに

最後に各章で明らかにしてきたことをまとめるとともに、本論を通じての考察をもう一度整理しておきたい。

第一章「大友義鎮の社寺破却とその意図について」では、義鎮の社寺に対する破却は、決してその存在を否定すべく行為ではなく、その情勢に鑑みた「政治的」意図に基づくものであり、様々な対応の一つである。戦国大名の社寺の権力否定が社寺の宗教的権威の失墜であると考えられているが、むしろその逆なのではないだろうか。本来社寺が為すべき、神仏の奉斎及び祭祀の齋行に収斂されていくのが、この戦国期なのではないかと思われる。

第二章「戦国期における太宰府天満宮留守職について」では、中世末期になると、大鳥居氏と小鳥居氏が留守職をめぐる対立を深くする。そしてその相論がもたらす隙が、天満宮に対して外部勢力の影響を受ける体質を形成していくことになる。大友氏と大鳥居氏、毛利氏（高橋氏）と小鳥居氏という対立構造が複雑化してくる。天満宮の破却也、留守職をめぐる争いというレベルを超えた土俵の上で起こることであり、両氏が争乱に巻き込まれることが、天満宮もまた同じく巻き込まれるという状況を生んだのである。大鳥居氏と小鳥居氏の和睦により、大鳥居氏を中心とする体制となり、祈祷巻数を時々の天満宮に関わる諸勢力に贈ること、天満宮の存在を主張し、崇敬を求めていくようになる。これが自衛的手段となり得たと思われる。

第三章「戦国期における筑後国一宮高良社と周辺勢力との関係」では、耳川合戦において大友氏が敗れたことで、九州における勢力図が大きく変化したことで、高良社にもその変化の影響がもたらされるようになる。大友方につく座主良寛・大祝・大宮司、そして龍造寺氏や島津氏につく座主麟圭と、内部分裂のみならず、周辺勢力の動向に流動的な対応せざるを得ない不安定な状況に置かれるようになるのである。その結末として、島津氏による高良山一帯の破却や秀吉の神領没収など高良社は危機に瀕することになる。しかし、この危機をもたらした状況が、何より中世を通じて形成されてきた体制をリセットすることになり、またその危機から脱することが高良社の再興への原動力として新たな出発点となっていたのではないかと思われる。高良社では、座主の分裂にともなう高良山内の動揺の解消と、弱体化した高良社の再興のため、大祝が『高良記』を編纂することで、高良玉垂神の神威向上、そして大祝自身の権威向上を目指すようになった。

第四章「中世後期における豊前一宮宇佐宮の動向・大内氏を中心に」では、中世後期において宇佐宮と大内氏は、相互利益と相互補完

という蜜月の関係を築いてきた。それは、大内義弘が豊前支配に乗り出した応永期から、大友氏に豊前支配を許す天文期までの約百数十年間と長きに渡るものであった。応仁の乱以前では宇佐宮はそれまで怠っていた造営と祭祀執行を果たすという課題を負っており、大内氏の登場によりそれらは解消するに至った。そして大内氏は豊前支配に対して、宇佐宮の荘園体制に依拠した掌握を進めていた。この段階では、お互いに為すべき目標があったので、それほど大きな問題も無く、相互に成熟期を迎えることができたのであるが、その成熟期を過ぎる応仁の乱以後では、惰性的な関係が継続されていくことになる。

第五章「出雲地方の社寺をめぐる尼子氏と毛利氏の動向」では、太宰府天満宮、高良社、宗像社においては内部分裂の経験から、社内統一という方向性が見いだされ、そのために「主体性」を持ち得ながら、戦乱の世の終焉を迎えていくが、それは、いずれも外部的圧力があつたからこそであり、そこから脱却するための動きであつた。宇佐宮のように長い期間、大内氏の庇護下にあつたが、大友氏の支配へと移行すると、それまでの既得権益は否定され、大友氏と毛利氏のあいだで翻弄することになるが、それまでの対応では通用しないことを思い知らされることになる。そういう観点から出雲地方を見ると、杵築大社をはじめ出雲地方の社寺は、尼子氏、毛利氏により、それまでの管理運営体制の転換が図られ、大名権力に社寺が持つ機能が吸収されながら、受動的な状況に置かれていく時期と思われる。それが是か非かはあるだろうが、いかに九州ではめまぐるしく変化する状況に「主体的」に適応対応することが求められたのかが見えてくるだろう。

第六章「戦国期における宗像大宮司の動向」では、宗像大宮司職が「子々孫々相伝の領掌」として代々社務職を継承し、社領 $\parallel$ 神社の経営管理を、そして武領 $\parallel$ 宗像領を治める棟梁という二面の側面を有していた。承久の乱で鎌倉御家人として参戦する時や、大内氏を頼って中国に下向していた足利義植を奉じて上洛するなど宗像の地を離れる時は、大宮司職を譲った上で行動をしている。これは宗像大宮司として、宗像を離れることは神事を怠ることになるからである。また本来なら社領・武領共に継承するものが、社領のみの相続に限定される場合や、大宮司職に就かなくても武領を管掌するなどイレギュラーな状況が生まれることもあつた。これは宗像大宮司の存在が、宗像社内部の掌握と宗像を治める領主としての対応が求められるものであり、これを維持していくためには柔軟な大宮司継承をしていく必要があつたかと思われる。

戦国期における九州、とくに筑前・筑後・豊前では、その掌握をかけて、大内氏、大友氏、毛利氏、島津氏、龍造寺氏らと、それに呼応する国人衆たちが戦を重ねていた。今回取り上げた、太宰府天満宮、高良社、宇佐宮、宗像社、いずれもその諸勢力の動きに翻弄されながらも、それぞれが不安定な状況から脱却するための「主体性」ある行動を取るようになったと思われる。

まず太宰府天満宮では長年、大鳥居氏と小鳥居氏が留守職をめぐって、内部対立を起こしていた。それに対し、筑前支配に乗り出して

た大内氏は、大鳥居氏が留守職に就く慣習を無視し、小鳥居氏を推す姿勢を取った。これは、大鳥居氏が敵対する大友氏との関係を嫌ったものと考えられる。大内氏の留守職に対する関与は、そのまま天満宮との関わりを強くするものであり、天満宮内部の対立という動揺が、天満宮経営に外部の勢力を受け入れるようになったのである。またこのことは、宗像社でも起こっており、宗像大宮司家の間で、大宮司職をめぐり、興氏（七十一代）と氏佐（七十二代）が対立し、興氏には大内氏が、氏佐には大友氏がそれぞれ背後につくようになり、その後は大内氏が大宮司職の譲与に大きく関与するようになる。逆に、高良社では、内部での対立構造は無かったにもかかわらず、諸勢力の均衡が崩れることで、内部分裂が生じるケースも出てきた。高良社は、座主が中心となり、その経営をなしていたが、一山の統率は大祝が仕切っており、大友氏に与していた。しかし、天正六年（一五七八）の「耳川合戦」で大友氏が負けると、大友方につく良寛と龍造寺方につく麟圭とに座主が分裂してしまう。そのことで、それまで大友氏と良好な関係であった高良社であったので、破却など受けずにいたのが、島津氏の北上により攻め崩されてしまう。

このように内部での対立が起こることで、諸勢力の介入を受けやすくなり、それが、そのまま代理戦争のごとく、戦火に巻き込まれることが生じてしまった。太宰府天満宮は、大鳥居氏と小鳥居氏の和睦により、大鳥居氏を中心とする体制となり、祈禱卷数を時々の天満宮に關わる勢力に贈ることで、天満宮の存在をアピールする中で、崇敬を求めていくようになり、それが自衛的手段となり、天満宮を守ることになっていく。また高良社では、座主の分裂にともなう高良山内の動揺と、弱体化した高良社の再興を、大祝が『高良記』を編纂すること、高良玉垂神の神威の向上、そして大祝自身の権威の向上を目指すようになった。

対して、宇佐宮では大宮司を中心とした荘園体制が敷かれていたためか、また大宮司職も宮成・到津・安心院・出光ら大宮司家があったが巡役制もあり、社内が分裂するようなことはなかった。むしろ神官社僧らが一丸となり「愁訴」するなど、まとまりが見て取れる。大内氏の支配下にある時は、大内氏が豊前支配に対して宇佐宮の荘園体制に依拠した掌握を進めていたこともあり、基本的には保護政策の対応であった。しかし、大友氏が豊前に入ってくると、それまでの大内氏による保護政策は否定され、城誘や軍役賦課など、宇佐宮への要求を強めていく。しかし、宇佐宮はこれまでの「先例」「社例」に基づき、これまでの既得権益を守ろうとするのである。しかし、大友氏はそれを許さず、破却を受けることになる。これにより、宇佐宮も外的圧力から脱するために、大友氏と敵対する毛利氏に与していくことになる。

これは杵築大社と状況が似ていると思われる、出雲が国造を中心とした国造上官制により自立した荘園体制を敷いていた。守護代である日子氏も、その後出雲入りする毛利氏も、この荘園体制を維持し、保護政策を取りつつも、杵築大社、鰐淵寺を掌握するにあたり、内部への介入を強めていくことになる。宇佐宮の場合は、大内氏の保護政策というアメから大友氏の支配政策というムチという転換期を持つことで、

慢性的な状態から脱却し、「主体性」を持ちうる機会を得たと思われる。大友義鎮（宗麟）も太宰府天満宮や宇佐宮など社寺を破却はしたが、その存在を否定するものではなかった。従来の中世的な社寺が持つ聖（宗教的側面）と俗（政治的側面）の相反するものを切り離す意図が見いだせると考える。政治的側面の権威や経済力の喪失を求めるものであり、宗教的側面、つまりは祭祀、祈願という本来社寺があるべき純粹な要素を抜き出すためには必要な行為であったのかもしれない。義鎮は、破却後の宇佐宮に対して、「祈願専一」としたのである。

宗像社では、大宮司職を「子々孫々相伝の領掌」として、代々社務職を継承しており、また「神官領主」として宗像の地を治めていた。杵築大社と同様、鎌倉期には幕府の御家人となり、奉公しているが、大宮司職の在り方として、「不出闕外上」という大宮司の身分では、宗像の地を離れないことがあり、大宮司職を「武役」と「社役」という分割をすることで、その問題を解消しようとした。大内氏が筑前に入るまでは、大宮司家の意向としての職掌の分割は見られたが、大宮司家分裂の際、大内氏の関与を許すことで、大内氏の意向による大宮司職の分割と一統がなされるようになった。最期の宗像大宮司となる氏貞は、大宮司氏正（黒川隆尚）の子として宗像ではなく、山口で生まれ、姓も黒川ということもあり、宗像入部においても好意的な受け入れはなされず、一から体制作りをしなくてはならなかった。しかし、それが氏貞にとつてはかえって積極的な行動への原動力となり、社役・武役を別つことなく、「神官領主」として、大友氏と毛利氏に對峙し、社内整備も様々と進めていった。なぜなら、大宮司としての「相伝」を守ることが、外部から来た氏貞を正当なる大宮司として認めてもらえることになるからではないだろうか。

戦国期の宗教勢力は、大名権力などにより否定、解体されることで宗教的権威が失墜していくとされる。しかし、本論を通して、少なくとも落ちた権威と弱体化した組織を建て直す姿は、垣間見られたのではないだろうか。連綿と現在も継承される神社において、時代や人や様々なことが変わっていく中で、唯一変わらぬものがあるとすれば、それは社に鎮座する奉斎神であると思われる。この奉斎する神々が拠り所となり、戦乱の世で衰退していく神社が、その奉斎神の神威によって、再びその存在性を顕かにする機会が戦国期にはあったと考える。今回は『戦国期における神社の動向・九州地方を中心に』と題しながら、大友氏や大内氏、また毛利氏との関連が深い社寺を一部取り上げる狭小的視野で論じるに留まってしまった。また管崎宮や住吉社など触れなければならぬ社寺も取りこぼしている状況も猛省するばかりである。さらに阿蘇社の阿蘇大宮司についても、宗像大宮司との比較検討まで及ばず、多くの課題を残している。今後の研究の糧とするとともに、この戦国期から近世への変遷に對し、社寺がどのような位置づけとなっていくのか、今回の論を踏み台に更に追究できたらと考える。